

10月5日（月）ヘブル人への手紙5章12節

「あなたがたは、年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。あなたがたは固い食物ではなく、乳が必要になっています。」

昨日の「聞くことに鈍くなっている」ということを、12節でヘブル人への手紙の著者は、「あなたがたは、年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。」と言います。まず信仰年数からすれば、教会の中で周りの人たちに教える教師であることが期待されていたにもかかわらず、そうはなっていないということです。教会員であるなら、すべての人が教師になる必要はありませんし、ここで言われていることは、むしろ他の人に伝えることのできる根本的な基礎知識を十分に持ち、それを日々の生活に適応しながら、周りの兄弟姉妹たち、特に信仰を持って間もない方々の模範にならなければならないにもかかわらず、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があるという意味です。これは信仰において発展や進歩がないだけでなく、むしろ初歩の教えすらできていない状態であったとも言えます。例えば、ここでヘブル人への手紙の著者が、旧約の時代の大祭司のことやイエス・キリスト、メルキゼデクのことについて語りたかったとしても、神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があるようでは、とても話せないし、信仰年数から考えて、当然理解できるだろうと思える人に十分理解できてもらえないやるせなさをこの著者は味わったのかもしれない。

すべてのクリスチャンにとって、信仰教育と申しますか信徒教育は非常に重要なものです。言葉を言い換えるなら、クリスチャンにとって聖書や教理を学ぶということは非常に重要なことだと言えます。なぜなら、学ぶことによる知的な理解を通して信仰は大いに成熟するからです。私も聖書宣教会で学ぶ中で、聖書や教理についての知的理解が進む中で、自分はこんなすごいことを信じているのかと感動をおぼえたものです。ですから、生田においては学びの機会が多くあることは本当に幸いなことだと思います。また良書を読むことにおいて学ぶこともできるでしょう。そのようにして私たちの信仰が学びにおいて成熟するように、学びの時間を努めて取れるようにしたいものです。そのようにして乳だけではなく、固い食物も食せるような成熟したクリスチャンでありたいと思わされます。

10月6日（火）ヘブル人への手紙5章13節

「乳を飲んでいる者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。」

12節の「あなたがたは固い食物ではなく、乳が必要になっています。」を受けて、乳を飲んでいる者はみな、幼子なのですよとされています。そのような人は、12節では「神が告げたことばの初歩を、もう一度だれかに教えてもらう必要があります。」とされていて、13節では「義の教えに通じていません。」とされています。義の教えが何を意味しているのかということについては多くの議論がありますが、ここで言われている義とは、正しさという意味にとるなら、乳を飲んでいる者たちは、義の教えに通じていないので、良い行いや正しい行いをするための正しい判断ができなかったり、義についてきちんと説明ができないということを行っているのでしょう。なぜなら、クリスチャンは、神が告げたことば、すなわち聖書のみことばから義を教えられ、その義の教えに通じていることで、正しさや正しい行いについて認識することができるからです。そして、義の教えに通じておらず、義を正しく認識できないことは、ヘブル人への手紙の著者からすると致命的なことに思えたかもしれません。なぜなら、何が間違っていて、何が正しいのかということを信仰生活の中で判断したり、それをきちんと教えて、説明できなければ、信仰を持った人たちがどのように行動し、どのように歩めばいいのか分からないということになるからです。

世の常識において善と悪の基準がいかにあいまいかということは私たちのよく知るところです。例えば、人によって善悪の判断がまるで違うということがしばしば起こるからです。同様にクリスチャンが正しさについて通じておらず、どう判断していいのかよく分からないというようでは困りますし、実際にそのような人たちばかりでは、教会の中で様々な問題が出てきたり、混乱することは容易に想像できます。

乳はもはや必要なく、固い食物も十分食べられ、幼子ではなく成熟した大人の信徒がますます教会の中に増えていくことを願います。

10月7日（水）ヘブル人への手紙5章14節

「固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」

12、13節と14節においては大人と幼子が対照的なかたちで出てまいります。乳を必要とし、乳を飲む幼子と固い食物を食す大人が比較されています。昨日述べた「義の教えに通じず、」にもつながりますが、善と悪を感覚的に見分けることができないとか、善と悪を理解力と

判断によって見分けることができないのは幼子です。実際に幼子を見ているとよく分かりますが、しつけとして大人がきちんと善と悪を教えなければ、善と悪をいつまでも判断することができず、そのうちに善と悪を教えるために厳しく叱責すると怒り出したり、すねたりするのが幼子です。逆に、大人のクリスチャンは、固い食物を食べ、それによって、信仰がますます成熟していきます。実際に、信仰において大人であるか、幼子であるのかは、様々な面で現れてまいりますし、実際に幼子としか思えないクリスチャンたちがいたということなのかもしれません。

「経験によって訓練された」とありますが、クリスチャンとしての一日一日の歩みが経験となっていくますが、私たちはクリスチャン生活を何となく送るのではなく、大人として信仰が成長するために、どうしても訓練が必要です。そして主は、私たちを訓練させるために、みこころの中であえて悲しく思える試練の中を通されることがあります。(12章5～9節参照) 訓練されるために私たちにとって必要なことは、主の訓練を受ける謙遜さと試練の中で起こり来る出来事にみことばを適用しながら、主のみこころが何かをおぼえることです。そのようにみことばから主によって教えられる訓練を通して、主のみこころは何かを悟ったり、善と悪とを見分けることができるようにされ、ますます大人として成長するように導かれていきます。

子どもたちは、日に日に成長し、大人たちは、子どもたちがこれまでできなかったことができるようになるのを見ることは楽しみであり、喜びです。そして、日々成長に応じた食べ物を与えようとするでしょう。ところが、子どもたちがいつまでも固い物を食べられなかったり、固い物を食べることを嫌がって、乳ばかり飲んでいたら、誰もが心配になることでしょう。主も、私たちの信仰をご覧になりながら、私たちの信仰が日々成長することを喜び、楽しみにしておられます。私たちは、乳ばかり飲んでいる幼子のままではないでしょうか。固い食物が食べられ、善と悪を見分ける感覚を訓練された大人のクリスチャンとされているでしょうか。

10月8日(木) ヘブル人への手紙6章1～3節

「ですから私たちは、キリストについての初歩の教えを後にして、成熟を目指して進もうではありませんか。」(1節)

6章1節で、ヘブル人への手紙の著者は、「初歩の教え」(5章12節)を後にして、「成熟を目指して進もうではありませんか。」と言います。すなわち、いつまでも乳を飲んでいる霊的な幼子ではなく、成熟を目指して進む中で、固い食物を食べ、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人となるように勧めています。その後具体的に初歩の教えが列挙されてい

ます。まず「死んだ行いからの回心」ですが、死んだ行いというのは、意味を持たないとか実効ある力に欠ける行いと言い換えることができるかもしれません。これはユダヤ人の律法を行うことによる救いと考えられます。そこから回心してクリスチャンとしての新しい歩みを始めたユダヤ人もいたことでしょう。それにもかかわらず、再び死んだ行いに逆戻りしたのでは、初歩の教えをやり直すことになりかねません。「神に対する信仰」は、回心により与えられるものですが、みことばを通しての神のみこころへの応答や11章にありますように、生活の中で信仰を実効性のあるものとして働かせ、信仰を証しすることが言われています。「きよめの洗いについての教え」は、キリスト教では洗礼を意味していますが、ここでは複数形が用いられているので、種々の洗いの儀式として規定されていたものがあつたと思われますが、そのような儀式が実際に行われていたのかはよく分かりません。「手を置く儀式」というのは、人を何かの働きに任命する時の按手や賜物を与える意味があります。「死者の復活」、「とこしえのさばき」は、キリスト教における基本的な教理です。大切なことは、これらの終末論的な教理が、人々の信仰に益となり、その信仰が励ましとなったり、慰めとなったりすることです。ヘブル人への手紙の著者は、ユダヤ教から回心したクリスチャンたちが、以前のユダヤ主義の古い生活に逆戻りして、まるでその人たちには信仰がないかのような歩みをしていた人たちがいたことが気がかりだったのです。そのような人たちは、キリスト教とユダヤ教をうまく使い分けられると考えたり、常に背教の危険があることに気がつかない問題があつたということです。

ユダヤ人クリスチャンの問題を私たちに当てはめると、まるで世とうまく折り合いをつけながら信仰生活も送れるとか、信仰を持つ前の生活と信仰生活を行ったり来たりするような問題と言えるかもしれません。もし、そのような信仰者であるなら、初歩の教えを、もう一度だれかに教えてもらわなければならない、乳を飲む幼子と言えます。私たちも、霊的な死による、空しい死んだ状態から救い出されて、神の恵みによって今の私たちがあるのですから、ともに主に感謝をして成熟を目指して進んでまいりましょう。

10月9日（金）ヘブル人への手紙6章4～6節

「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となつて、神のすばらしいみことばと、来るべき世の力を味わったうえで、墮落してしまうなら、そういう人たちをもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、さらしものにする者たちだからです。」

「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となつて」というのは、クリ

スチャンである人を指しています。実際に、ここの箇所は解釈が難しく、さまざまな意見が出されています。その中から二、三紹介しますと、1) これは、一度救われたクリスチャンであっても墮落し、救いを失った者もいたということを言っているとする説で、そのようなクリスチャンが信仰を回復することの困難さを言っていると主張する人たちがいます。2) 墮落してしまったキリスト者は、本当のクリスチャンではなかった、まことの救いにあずかっていなかったとする説で、それゆえに、まことの信仰や愛、忍耐にまで至らず、信仰から離れて背教してしまったと考える人もいます。彼らは岩の上に落ちた種のように、形式的に交わりに加わってただけで恵みが心の奥深くまで届かなかったので、何かあると花が枯れるように、信仰を離れてしまうというわけです。そして、自分はこのように墮落してしまったらどうしようとか、聖霊に対する赦し難い罪を犯したらどうしようと悩む人もあります。しかし、本当に墮落した人で、そのように悩む人はいないでしょう。むしろ、そのように悩むことも聖霊が働いている証しと言えます。3) 実際に、このようなキリスト者がいたというわけではなく、一つの仮定としてこのような背教のことを想定しつつ、そうならないようにという警告だと考える説などもあります。そして実際に具体的な背教の指摘もないので、私は三番目の救われたクリスチャンに対して墮落しないようにと警告していると考えるのが適切かと思います。

私が、ここであらためて思わされたのは、一度キリストにある救いをいただいても、それは一生涯信仰を持ち続けていく保証にはならないということです。私たちは、この罪の世に生きる限りにおいて、いつでも墮落し、信仰を捨ててしまう可能性があるということです。それと同時に、私たちが信仰においていつまでも成長しないで、幼子のような状態のままでいたならば、私たちはそのように墮落してしまう可能性がさらに増すということです。そういう意味でも、私たちは常に成熟を目指して成長していくクリスチャンでありたいと願われます。それとともに、私たちは決して自分の力で信仰を全うするものではありません。すべて主のあわれみと恵みです。このような者を救いへと入れてくださった主は、このような者をもあわれみにより信仰生活を全うできるように常に守り、支えてくださるのです。

10月10日(土) ヘブル人への手紙6章4節

「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となって」

神を信じた者はみな「光を受ける」者とされます。ここで言われている「光を受ける」というのは、新約においては人に対して神のメッセージが与えられることを指しています。コリント人への手紙第二4章4節を見ますと、この世の神がキリストの栄光の光を輝かせないようにし

ているけれども、6節では「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。」とあるように、ここで言われている神の栄光を知る知識が光を受けると考えることができるかと思います。「天からの賜物の味を知り」というのは、救いの賜物を通して与えられる祝福、御霊を通して与えられる神様からの恵みと考えることができるでしょう。これは神様のみから来る霊的な祝福であり、この地上にあつてクリスチャンだけが味わうことが許されている特権的な恵みと言えます。また「聖霊にあずかる者となり」というのは、聖書の約束として信じるすべての人に賜物として聖霊が与えられています。その聖霊が私たちのうちに住んでいてくださるのです。

私たちがここで考えなければならないことは、私たちがキリスト者として経験するすべてのことは、ただ神からの恵みだということです。つまり、神がみこころによる選びを通してふさわしくない者に一方的に恵みとして与えてくださったものです。それを考えた時に、私たちの心に出てくるものは主への感謝以外にあるだろうかと思わされます。そして私たちは決して墮落し、信仰から離れるのではなく、最後まで信仰を守り通すことにより、決してこれらの神の恵みをむだにしないような生き方をさせていただきたいと思わされます。

10月11日(日) ヘブル人への手紙6章5節

「神のすばらしいみことばと、来るべき世の力を味わったうえで」

私が今日のみことばで注目させられたことは「味わった上で」ということばです。信仰を捨ててしまったり、墮落する中で問われるべきことは、神のみことばのすばらしさ、またみことばを通して説き明かされる、来るべき世の幸いとその力とをどれほど味わっているかということです。みことばは、ただ聞くだけではそのすばらしさは分かりません。味わうことが大切なのです。ダビデは、本当に神のことばのすばらしさを味わった人物と言えるでしょう。彼は、「あなたのみことばは 私の上あごになんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。」(詩篇119篇103節)と言っています。しかし、みことばは私たちの口に甘いだけではありません。時には、味わう中で苦さを感じる時もあるでしょう。しかし決して吐き出さずに、そのまま味わい続けたなら、それが時には私たちに対する悔い改めへの信仰へと導くこともあるのです。ダビデが告白するほどに主のみことばのすばらしさを味わったとしたら、簡単に信仰を捨ててしまうということがあるでしょうか。

それと同時に「来るべき世の力を味わったうえで」ということです。来るべき世の力とは、イエス様の再臨を通してもたらされる来るべき世、御国の完成、神の完全な支配を指していると

考えられます。私たちは、御霊を通してこの幸いを来るべき世の前味として部分的に味わうことができます。そして他の兄弟姉妹との交わりにおいて、主の再臨を信じ、その時を大いなる喜びの日として待ち望んでいるならば、私たちは簡単に信仰を捨てるということはできないはずです。むしろ、そのことに対して目が開かれず、正しく教えられていなければ、信仰者としての苦しみの中で、信仰を持つことがばかばかしく思えてくることもあるかもしれません。私たちは、後に来る世とその力をどのように信じているでしょうか。苦難の中でも確信を与え、希望によって心が燃え立たせられるような信仰が与えられているでしょうか。